

無アクセント方言の音調

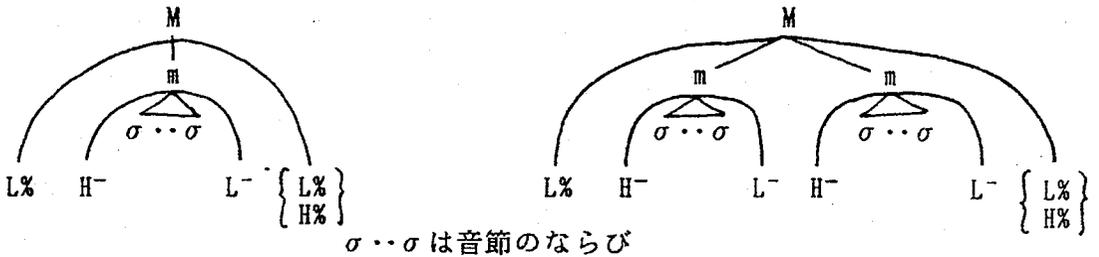
前川 喜久雄 (国立国語研究所 & D1班)

1 無アクセント方言の研究方針

- ① 文・談話レベルの現象を重視すべき (前川, 1990, 「音声言語」IV)
- ② 共時的イントネーション・システムの存在を仮定する ← **本発表の主題**
- イントネーション・システムは発話の一部分でなく発話全体のピッチ・パタンを説明するものとかんがえる。イントネーションは局所的音調のリストではない。
- 一方言で現実に観察される多様性にとむピッチ・パタンすべてを統一的に説明しうるモデルの構築をめざす。

2 熊本イントネーションのモデリング

- 若年層2名—A (F, 20)とT (M, 23)—の資料を説明するイントネーション・モデル構築のこころみ。経過報告。
- モデルの基本的枠組み
 - ・ (最低) 2段階の階層構造 major phrase (M) と minor phrase (m) を設定。
 - ・ Mの左端には境界音調 (boundary tone) L% が、右端には L% ないし H% が存在する。mの左端には句音調 (phrase tone) H⁻ が、右端には L⁻ が存在する。



■ 音調付与規則 (Provisional)

- (1) M所属の発話左端の L% は発話の先頭音節にリンクされる。発話末尾では L%, H% のいずれかひとつが選択されて最終音節にリンクされる。
- (2) L⁻ は m 句境界の近傍に位置する。
- (3) H⁻ は L% と L⁻ にはさまれた区間の任意の 1 音節にリンクされる。既に境界音調がリンクされている音節でもかまわない。
- (3) によって tone floating (音調浮遊) が生じる。熊本イントネーションの多様性の大部分は、これによって説明される。どの音節がえらばれるかは音韻論だけでは決定不可能。意味論の問題。一部はまったくの自由変異かもしれない。

■ 韻律表示の調整

- (1) L⁻ 削除(その1): 発話末尾では H⁻ と H% の間に位置する L⁻ が削除されることがある。【例1_c, e; 例2_a; 例3_b; cf. 例2_c】
- (2) L⁻ 削除(その2): m 句境界近傍の L⁻ は削除されうる。(Tone spreading?)

3 問題点

■ L⁻ 削除(その2)には不明点がおおい。削除が生じる条件は? 【例3_d, e, 例5】

■ 中間階層の必要性

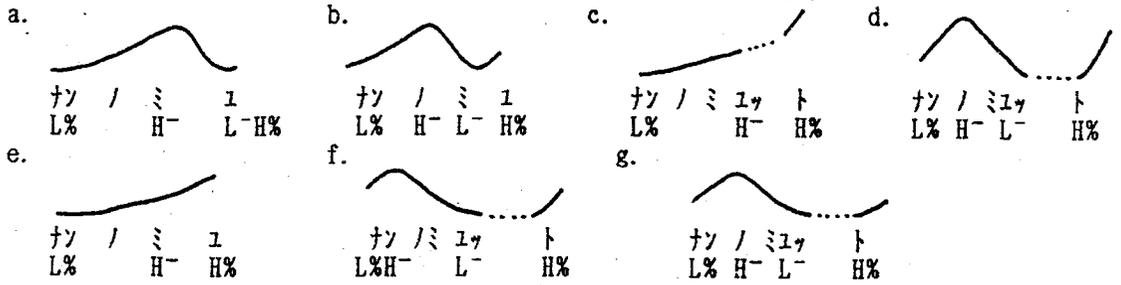
列挙構文【例4】などでは H⁻ のピーク値に downstep 的な下降が (小規模であるが) 観察されることがある。M 句と m 句の中間にあらたな階層が必要なのか?

■ 社会的変異

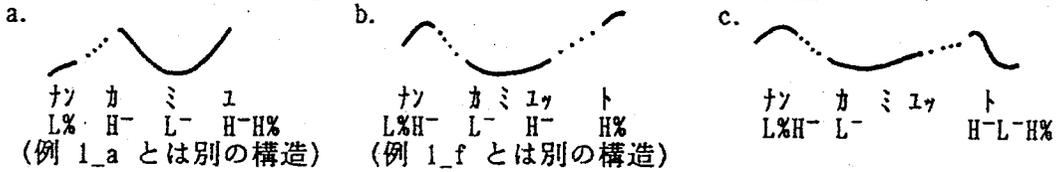
- ・ 60代男性1名の資料をみるかぎり高年層のイントネーションは今回のモデルでは説明できない。(例5のパタンがおおい。) また統語構造の反映に関しても若年層とことなる可能性がある。
- ・ Intonogenesis? (共通語化?)
- ・ 今後、社会言語学的な観点からの研究も必要。

4. 熊本方言若年層のピッチ・パタン (末尾境界音調 H% のリンクについては暫定的)

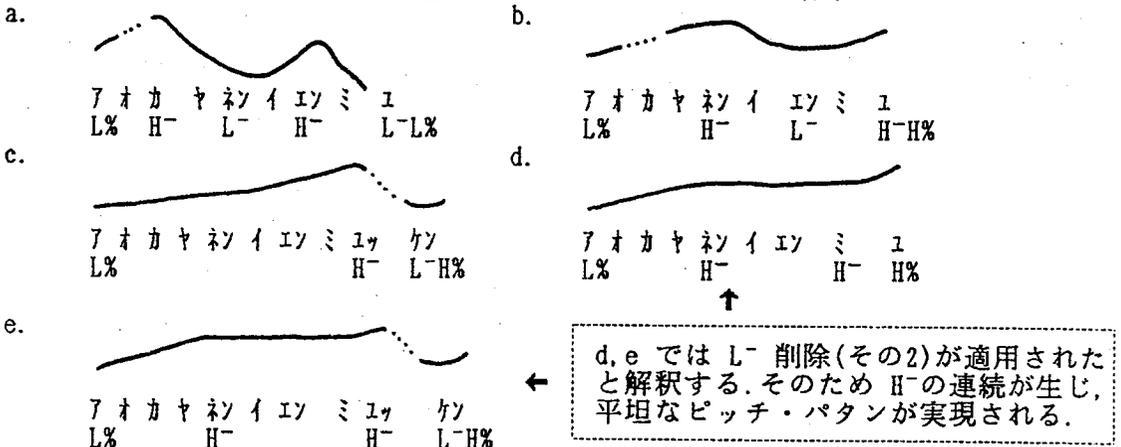
■例1: 「何が見える？」(上段はT, 下段はAの発話. 1M=1m)



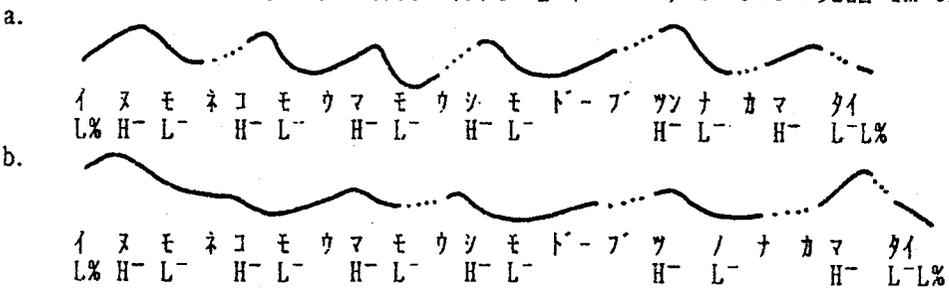
■例2: 「何かみえる？」(a はT, c はA, b はT&Aの発話. 1M=2m)



■例3: 「青い屋根の家がみえる」(a はT, のこりはAの発話.)



■例4: 「犬も猫も馬も牛も動物の仲間だ」(a はT, b はAの発話 1M=6m)



■例5: 「誰が次郎と一緒に海に泳ぎにいったんだ？」(Aの発話)

